

## 「ポストコロナの英語コミュニケーション — 実務分野から見た今と未来 文化論的考察」

宮 崎 修 二

(高度技術社会推進協会)

### 1. IT時代の英語コミュニケーション 20年を振り返る

筆者は、2001年10月のJASEC年次大会における『IT時代の英語コミュニケーション』と題するシンポジウムのパネリストとして、当時本格化しつつあったIT (Information Technology) 時代における英語コミュニケーションの方向性や課題について述べた<sup>(注1)</sup>。新世紀の第1年目、911同時多発テロ発生から1か月後のことだ。それから20年。IT新時代の幕開けを過ぎ、コロナ禍を経験した今、何が変わり、現時点をどう捉え、将来に何を見るのか俯瞰したい。

### 2. 2001年に指摘したこと

#### (1) IT化の3つの特徴

①『直接性』 InternetやE-mailにより情報は直接目の前にやってくる。一方、ユーザーを有無を言わず巻き込む「暴力性」もあり、取捨選択能力の涵養が一層重要になる。

②『即時性』 情報の同時大量移動が常態となり、情報を扱う者にとっては、即時のコミュニケーション対応能力が求められ、組織には、タイムリーな情報公開、広報、PRが求められる。

③『劇場性』 コンピューター等で把握する世界は「Virtual」であり、コミュニケーション主体には「演技力」が求められ、客体には「演技」と「本質」とを見抜く力が求められる。

#### (2) 英語コミュニケーションへのIT化の影響

①IT化は『Mediaの革命』なため、メディアで伝えられる『Contents』の量と種類は増加する一方、『Players(送り手、受け手)』の対応にも変化が求められるが、英語コミュニケーションの基本は従来型。『直接性』『即時性』は、むしろ基本的な英語能力の重要性を高める。

②ビジネス分野では、Websiteを通じ、商品や企業イメージを瞬時に世界的な広がり、直接、消費者や社会に周知する活動が重要。user-friendlyな使い勝手、nativeにも理解されやすく、clientに直接訴求する英語コミュニケーション手法の必要性が増す。一方、企業間・貿易取引におけるE-Commerceの進展、E-mailの多用が常態化する。

③非ビジネス分野(公的セクター等)では、諸外国のカウンターパートとの直接的コミュニケーションが増大。E-mail、Tele-Conferenceの利用は日常的となり、職員の英語運用能力の涵養が一層重要となる。情報公開進展や国際的な説明責任の増大が顕著となり、通

訳・翻訳業務への需要増大とともに、自らチェックし、コーディネートする高次の能力も必要となる。

④個人レベルでは、E-mailの多用で、個々人は英語コミュニケーションの直接の当事者となり、基本的、常識的で、国際基準から違和感のない英語運用能力が求められる。送り手、受け手には、定型化、陳腐化からの脱却が求められる。大量、定型処理はコンピューターに任せ、個々人は個性的で知的な活動へシフト。contents (=メッセージ内容)を、意味のある、ユニークなものにするため、英語のみならず、各個人の知的発信力を強める努力が求められる。

### 3. 20年後 — コロナを経験した今

(1) 20年を経過した今、新型コロナウイルス禍にあって、「IT化」はどのように捉えられるだろうか。現在でも『Mediaの革命』という「IT化」の本質は変わらない。その深化により、人間は定型的なことから解放され、創造的なことに集中できる可能性がある、という点も変わっていない。また、求められる英語の質も、基本的英語運用能力習得の重要性も変わっていない。

(2) しかし、この間にIT化は予想を超えて進んだ。ネットの利便性増大により、E-mailのみならず、E-Commerceが一般化し、映像通信も急拡大を遂げ、VR化、リモート化が進展した。AI技術の急速な進化で、ネット利用の新規ビジネスの叢生も見られる。IT化の特質だった『直接性』『即時性』『劇場性』はさらに先鋭化し、日常生活へも想定を超えて浸透した。特に、コロナ禍による「リモート」の常態化により、生活モード自体の変化が決定的となった。

(3) もちろん、明るい面(Bright Side)はある。リモート環境では面倒な人付き合いと通勤の負担が減少し、自宅で、時間を自由にコントロールして仕事が行える。オンライン会議システムの深化で、情報交換は機能的になった。コンピューター、スマートフォンの高機能化と低廉化、普及拡大、セキュリティ技術の進歩も著しい。AIはリモートの成立要件となり、通信システムの進化及びインフラ整備の進展で通信コストも激減した。

(4) だが、暗い面(Dark Side)も見えてきた。リモートワークでは、仕事の実施状況についての管理が厳格となる一方、オンライン会議はあるものの、人と人とのきめ細かいやり取りが減少した。「リモートワークの陥穽」と言えるかもしれない。労働時間における拘束性がかえって高まり、個人の自由時間以外を切り売りするという、欧米型の労働観念が支配的となった。

(5) 1936年、チャールズ・チャップリンが映画『Modern Times』の中で描いた「大恐慌後」の時代の記憶が呼び起こされる。物語では、テレビが工場労働者を指揮監督する、当時としては夢物語のようなシーンもある。労働者は機械に管理される歯車となる。利便さや効率性が人間に逆襲する。この新しい文明に対応できない人々は、管理の「軛(くびき)」を逃れ、言葉に頼らない古くて新しいコミュニケーション方法を見つけ出す。セリフをしやべらなかつたチャップリンは、ついに身振り手振りを駆使し、意味のない言葉で歌い、踊る。キャプションには“Sing! Never mind the words.”<sup>(注2)</sup>の文字。「はじめに言

葉ありき」で象徴される西欧文明だが、「言葉(論理)にとどまらないコミュニケーション」の存在が示される。80年以上前の彼の深い洞察に驚かされる。

#### 4. ポストコロナの英語コミュニケーション これから大切になる3つの「ジョウ」

- ① IT化の持つ絶大な影響力から、正確さと公正さを実現する『条理』の思考が重要となるだろう。即時性の高まりは、より透明で正確な、すなわち『条理』に則ったコミュニケーション活動を必要とする。それは正確な英語運用能力の涵養が一層重要なものとなることを意味する。
- ② これと背馳するように見えるが、『情緒』の重要性も増すだろう。オンラインの即時性と無機質な理非判断の先鋭化により、「人間」という「社会的存在」への配慮や思いやりが欠如し、各人は孤立化し、『自己疎外 (self-alienation)』に陥りかねない。人間には『情緒』が必要なことが再認識され、潤いと人間性にあふれ、ユーモアも含んだ『情緒』、すなわち「教養の力を持った」英語コミュニケーション能力(英語運用能力)の涵養が重要となるだろう。
- ③ コミュニケーション活動における『冗長さ』の必要性も再認識されるだろう。機能一辺倒でなく、趣きや余韻あるコミュニケーションが求められ、ITを利用したコミュニケーションシステムにも、セキュリティの観点も含め、『冗長さ』が重要なことに気付かされるだろう。「間」や「遊び」という「日本的な contents」の創造が大切になり、正確さとともに、『冗長さ』を含んだコミュニケーション文化の創造、それを踏まえた英語運用能力の涵養が重要となるだろう。

ポストコロナの時代、これらにどう対応していくかが我々に提起された次なる課題である。

注1. 宮崎修二『IT時代の実務英語コミュニケーション』THE JASEC BULLETIN 第11巻第1号(2002年9月)

注2. Charles Chaplin 『Modern Times』 United Artists (1936)